



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 中国語の身体部位を用いた二音節語の比喻義に関する一考察                                                   |
| Author(s)    | 劉, 婉儀                                                                         |
| Citation     | 言語文化共同研究プロジェクト. 2026, 2025, p. 115-132                                        |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/106341">https://doi.org/10.18910/106341</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 中国語の身体部位を用いた二音節語の比喻義に関する一考察

劉 婉儀 (刘 婉仪, LIU WANYI)

### 1. はじめに

現代中国語では、「首領（集団の頭）」、「心腹（腹心）」、「爪牙（悪勢力の手先）」といった、人の役柄を表す二音節語が慣習的に使われている。その中には、人の身体外部にある部位を用いて表現しているものが多い。中国語は、一字一音節の言語である。これらの二音節語は、もともと関連性のある身体部位詞がそれぞれ構成要素として語またはフレーズを構成し、字義通りの意味を表していたが、言語表現の使用頻度や語彙化の発展などを介して慣用的な意味を拡張していったと考えられる（董 2002、2011；丁 2006）。

例えば、丁（2006）によれば、「首（頭）」と「領（頸部）」という単音節語は戦国時代初期において、「保首領（頭と頸部を保全する）」というように、斬首の刑と密接に関係を持つ語として結合して「頭と頸部」を意味するフレーズとなった。その後、頻繁な使用や隠喩を通じて、「首領」は「命」、「集団の頭」という意味を拡張した二音節語となっていく。現代中国語に至ると、「首領」には「集団の頭」という常用の意味が定着している。この例では、頭と頸部は身体が一番上の位置にあり、命とかかわっている大事な身体部位である。その認識を土台にして「首領」は隠喩を通じて集団の頭を意味するようになったと述べられる。このような身体部位の比喻表現はどのように隠喩を通じて意味拡張したか、首と領でなければ成り立たないかといった問題点を解決するには、認知言語学のアプローチが必要であると考えられる。認知言語学の知見では、人の身体感覚や運動感覚などの経験や、メタファーやメトニミーといった認知プロセスを通じて、身体部位の概念を形成し、その認識を言語表現に反映させることから、身体部位を使った比喻表現は人間の概念形成と深く結びついていると考えられている。そこで、首領だけでなく、首領と同様に隠喩を用いた、かつ人の役柄を表す身体部位の比喻表現（例えば、心腹・腹心、股肱、爪牙など）も、認知言語学の知見を援用して分析・考察することが可能である。

これまで中国語の身体部位を含む慣用表現に関する比喻研究は多数存在するが、認知言語学の視点から、身体部位詞を用いた二音節語に限定して比喻義の通時的変化の特徴を整理した研究は管見の限りでは見られない。本稿は、認知言語学の観点に立ち、身体部位を用いた二音節語を対象に、文献の実例の通時的分析を通して、各々の二音節語がどのように字義通りの意味から抽象的意味へと拡張していったかを考察し、それぞれの二音節語と人の役柄との対応関係の特徴、意味変化に関する認知的要因を明らかにする。中国語では、各々の身体部位を協働させて全体的に身体を認識しており、類推や連想を通して抽象概念を理解するというのが本稿の主張である。

本稿の調査対象は、次のような基準で選定した。

- (1) ①身体部位詞と身体部位詞の結合が先秦時代に出現した
- ②その複合語の意味が基本義から抽象化された
- ③その複合語が慣用的に使われている
- ④その複合語の意味と人の役柄との間に対応関係がある

先秦時代では、単音節語が主流で用いられていたが、語彙化の芽生えと発展に伴い、二音節のフレーズまたは語が産出された（董 2011：9-10）。そのため、首領、心腹・腹心、股肱などのように、先秦時代の単音節語である身体部位詞と身体部位詞が結合することになった<sup>1</sup>。且つ、調査対象は意味が拡張されたことが必須条件であり、首領と同じく、人の役柄との対応関係も持っていることが望ましい。この4つの条件に従って選んだ二音節語は、首領（頭と頸部）、耳目（耳と目）、心腹・腹心（心臓と腹、あるいは胸と腹）、股肱（太ももと上腕）、爪牙（爪と奥歯）である。その

<sup>1</sup> 丁（2006：285-289）によると、首（頭）と同じ意味の「頭」も先秦時代の文献に見られた単音節語であり、「首」の出現より遅れたが、「首」と同様に「かしらとする人」という意味を拡張した。「頭」と「領」との複合が「首領」より遅れて、六朝に至ってはじめて文献で見られるようになった。六朝において、首領が「頭と頸部」を表すフレーズから「集団の頭」を表す二音節語に変化して存在したため、「頭領」はフレーズの段階を経ずに、直接に「集団の頭」を表す二音節語となった。六朝から首領と頭領が並行して使われていたが、文献の中では首領の方が使用頻度が高かったと述べられる。そこで、本稿はより早い段階で出現した「首領」を選ぶことにした。

中では、「首領」については、先行研究でその意味変化が通時的に分析されているもの(e.g. 丁 2006)があるため、本稿では重複の通時的分析を割愛して考察の際に先行研究の知見を援用する。また、「耳目」についても紙幅の関係で割愛する。ほかに、「心腹・腹心」「股肱」「爪牙」は一緒に使われて人の役柄を表す場合がしばしば見られ(e.g. 及其亂也, 諸侯貪冒, 侵欲不息, 爭尋常以盡其民, 略其武夫, 以為己腹心、股肱、爪牙。「春秋左傳・成公・傳十二年」)、1つの組織の中でそれらの語が関連しあい、それぞれの役柄を担っている。そこで、本稿は心腹・腹心、股肱、爪牙を調査対象にし、『漢語大詞典』(第二版)や『大漢和辞典』などの辞書を参照し、および台湾中央研究院古漢語文獻語料庫(台湾中央研究院古代中国語文獻コーパス)から実例を抽出して分析・考察する。

本稿の構成は次の通りである。1節では本稿の目的や調査方法を紹介し、2節と3節では本稿で扱う理論的枠組み、先行研究を概観し、4節では実例の通時的分析を行い、5節では4節の分析を考察し、6節では今後の課題を出す。なお、本稿は認知言語学の論文の慣例に従い、前述丁(2006)の説明に用いた「隱喻」、および「換喻」をそれぞれメタファー、メトニミーとする。〈〉は概念レベルの言語表現、概念メタファーを表す。

## 2. 理論的枠組みの概観

この節は、本稿で扱う Lakoff & Johnson (1980)、Lakoff (1987)におけるメタファー論、イメージ・スキーマを概観する。

まず、メタファーはレトリックの一種であるとしてよく知られているが、Lakoff & Johnson (1980)によれば、メタファーは単にレトリックではなく、人間の認知能力とかかわっているものであり、物事の内容を理解するための手立てであると考えられている。メタファーは、概念間の写像(Mapping)を経て、具体的な概念領域(Source domain、根源領域)の概念(の要素)を通して、抽象的な概念領域(Target domain、目標領域)の概念(の要素)を理解する認知的仕組みである。一連の言語表現に見られるメタファーから構成された、より包括的なメタファーは概念メタファーとされている。例えば、(2)で示した例のように、〈時間〉という抽象的概念を理解するには、現実世界の〈金〉の概念を用いている。例の中では、浪費する(waste)、節約する(save)、使う(spend)など一連の〈金〉に関わる表現が使われることで、〈時間〉に対する言語共同体の共通的な理解が反映されている。つまり、概念メタファーの本質はある概念を、それと対応する概念を通して理解して把握することである(Lakoff & Johnson 1980 : 5)。メトニミーは同一の概念領域においてある概念を用いて他の概念を代表する、メタファーとは異なる認知プロセスであるが、メタファーと同様に、体系的に私たちの概念世界を構築している(同上 : 39)。

### (2) 〈TIME IS MONEY〉〈時は金なり〉

You're *wasting* my time. 〈君はぼくの時間を浪費している。〉

This gadget will *save* you hours. 〈この機械装置を使えば何時間も節約できる。〉

How do you *spend* your time these days? 〈この頃どんなふうに時間を使っているの。〉

(Lakoff & Johnson (1980 : 7-8)、日本語訳と下線は渡部ほか訳(1986 : 9)による)

Lakoff (1987 : 386-387)によると、メタファーの概念間の構造的な対応関係は「存在的対応関係(Ontological correspondence)」と「認識的対応関係(Epistemic correspondence)」に大別される。前者は異なる概念間におけるもの同士(entities)の対応関係であり、後者は概念間における知識同士の対応である。例えば、〈ANGER IS THE HEAT OF FLUID IN CONTAINER〉メタファーでは、〈the heat of fluid〉と〈anger〉は存在的対応関係を成しており、容器の中で爆発が起きて隣の人を傷つけることは、怒りの爆発で自分や他人を傷つけることに対応している(Lakoff 1987 : 387)。この構造的な対応関係は、概念メタファーの体系性を裏付けていると言えるだろう。本稿は、こうしたメタファー論を援用して、首領、心腹・腹心、股肱、爪牙という身体部位と、ある組織の中において異なる役柄を持つ人との対応関係を明らかにする。

次に、イメージ・スキーマに関しては、簡潔に言えば、イメージ・スキーマ(Image schema)は、人間の身体感覚、空間認知、運動など日常の経験から抽象化された認知図式である。例えば、容器のスキーマ(The CONTAINER Schema)は、呼吸などの身体感覚や空間認知から抽象化されたものであり、境界線をもって内と外を区別し、中身を持っているという特徴を持つ。それをもとにし

て人間は経験的に現実世界の概念を容器の領域に捉えることができる (Lakoff 1987 Ch17 ; Johnson 1987)。例えば、〈THE VISUAL FIELD IS A CONTAINER〉などのメタファーがあげられる。つまり、スキーマは概念と概念の関係を理解する図式であり、メタファーを把握するための基礎だと考えられる。本稿で扱う〈部分—全体〉スキーマ (The PART-WHOLE schema)、〈中心—周辺〉スキーマ (The CENTER-PERIPHERY Schema) も見ていきたい。

Lakoff (1987 : 273) によると、〈部分—全体〉スキーマは、身体と身体各部位を部分と全体に分けて認識するという経験に基づき、物事の部分と全体の構造を理解している。例えば、家族または組織には「全体と部分」の構造が配置されている。家族は夫婦と子供を中心に構成され、組織は頭と部下から構成された全体である。ただし、全体の中の各部分は対等の関係を持っているとは考えられない。Lakoff (1987 : 274) では〈中心—周辺〉スキーマの身体経験について、私たちは、身体を中心的部位 (胴体と内臓) と周辺の部位 (手足、爪、髪など) に分けて認識しており、中心的部位をより重要視していると述べられる。中心的部位の重要性は、命と関わっている側面、個体のアイデンティティを定義する面から理解される。例えば、内臓の損傷が命を落とすことにつながる点、髪など周辺の部位が失われても、その人の本質は変わらない点、中心的部位の悪化は周辺の部位に大きな影響を与える点が挙げられる。このように、周辺の部位は中心的部位に依存しているが、その逆ではないと主張されている。まとめると、〈部分—全体〉スキーマと〈中心—周辺〉スキーマに基づき、私たちは、身体や物事が全体と部分に分かれており、その中で、中心にある部分が重要な位置を占め、周辺に影響を与えることができると理解していると考えられる。本稿は認知意味論の知見を援用し、分析・考察を行う。

### 3. 先行研究の概観

この節は本稿と密接な関係を持つ丁 (2006) を概観する。丁 (2006) は中古中国語 (後漢魏晉南北朝隋代)<sup>2</sup>における常用の並列二音節語の成立と変遷を通時的に研究するものである。丁 (2006) では、本研究と関わる「首領」は類義並列二音節語<sup>3</sup>と見なされ、最初は「頭と頸部」を表すフレーズであったが、六朝になると、集団の頭を表す二音節語になったと指摘される。「首」は甲骨文、金文において人の頭の形で描かれる。「領」は最初に人の頸部、動物の頸部を表したが (e.g. 『詩経』、『左伝』から特に人の頸部を指すようになり、首領、要領などの組み合わせにおいて用いられるようになった (丁 2006 : 282)。戦国初期から、『左傳』をはじめ、首領は名詞フレーズとして生まれて使われていた。以下抜粋した例のように、「保首領以歿 (頭と頸部を切らずに処刑する)」「保首領 (斬首の刑から頭と頸部を保全する)」など、古代斬首の刑、命とかかわる表現が出現し、頻繁に使われることで、「首領」には「命」を表す意味が段々定着していったと考えられる (同上 : 283)。中古中国語においても、「首領」のこの用法が引き継がれていた。

- (3) a. 若以羣子之靈，獲保首領以歿，唯是楸枰所以藉幹者，請無及先君。(《左傳・昭公二十五年》)  
b. 若得保其首領以歿，唯是春秋所以從先君者，請為“靈”若“厲”。(《國語・楚語上》)  
c. 進無敵，退有功，是以三軍之眾，皆得保其首領，父母妻子完安於內。(《管子・法法》)  
d. 聖人者日新，改作更始，使老者得息，幼者得長，各保其首領而終其天年。(《史記・匈奴列傳》)  
e. 孤以首領相付矣。(《後漢書・袁紹傳》)  
f. 時帝凶悖日甚，誅殺相繼，內外百司，不保首領。(《宋書・前廢帝本紀》)  
(丁 (2006 : 282) をもとに作成。下線は筆者による。以下も同様。)

六朝から唐代まで、「首領」は「ある集団の頭」を意味するようになり、唐代の文献において頻繁の使用が観察された。例えば、「流人首領」「南越首領」といった組織・地域の首領の例があげられている。唐代以降、集団の頭という意味が慣習的に定着し、現代まで使われている。ただし、語彙変遷の段階性のため、清代まで、命を表す用法、頭と頸部を表す用法も少量残していたと指

<sup>2</sup> 原文のままの引用。中古中国語の時代範囲に関しては多岐にわたり、定説はまだない。

<sup>3</sup> 2つの構成要素が類義で、並列の形を持つ二音節語である。2つの構成要素は意味が関連しており、共通する上位概念を持っている。各構成要素が表す対象がよく連用する。頻繁の使用や全体の意味の変化を通じて、並列フレーズから並列二音節語へと変化した。先秦時代ではすでに類義並列の語が出現し、中古中国語の文献では、名詞をはじめ、数多くの並列二音節語が見られたと述べられる (p.281)。

摘される（同上：285）。

- (4) a. 朝廷初以鉄券二十枚委津分給，津隨賊中首領，間行送之，修禮、普賢頗亦由此而死。（《魏書・楊播傳附楊津》）
- b. 辛冉性貪暴，欲殺流人首領，取其資貨，乃移檄發遣。（《晉書・李特載記》）
- c. 譙國夫人洗氏者，高涼人也。世為南越首領，部落十餘萬家。（《北史・列女傳・譙國夫人洗氏》）
- d. 軍再舍，潛遣人覘之，知其首領盡歸柵，聚飲相賀。（《隋書・周法尚傳》）

（丁（2006:284-285）をもとに作成）

丁（2006）の例では、「首」と「領」の連用はなぜ「命」「集団の頭」という意味を拡張したかという、頭と頸部は身体の上部にあり、大事な身体部位であり、切られると命が落ちることにつながる。命と関わる側面からみると、頭と頸部が切られないことが、命が保全する原因になるので、メトニミーが働いていると考えられる。ある集団の頭も権力の頂端に立ち、部下を制御し、重要な事を決定する役柄を持っている。そのため、メタファーの類似性に基づき、身体領域の概念を社会組織領域の概念と対応づけることができる。

古代中国語の文献では、首領だけでなく、首領と同様に人の役柄を示す語がいくつか存在している（e.g.心腹・腹心、股肱、爪牙など）。本稿は、丁（2006）の「首領」の分析を切り口として、認知言語学の知見を援用し、先行研究で検討していなかった、「首領」以外の身体部位詞の二音節語を調査対象として、古代文献の実例を分析することを通して、これらの語と、組織における人々の役柄との対応関係を考察する。

#### 4. 実例の通時的分析

この節では、心腹・腹心、股肱、爪牙をキーワードに、辞書とコーパスから実例を抽出して分析する。データの出典の一つである台湾中央研究院古代中国語文献コーパス（以下 ASACC と略称）に関しては、上古中国語、中古中国語、近世中国語の文献を網羅的に収集したデータベースであり、中国語史の時代区分を「上古：先秦から前漢」「中古：後漢から魏晉南北朝」「近世：唐代五代以降」としている。しかし、中国語史の区切り方は研究者によって多岐にわたり、定かな説はまだない。本稿は意味を中心に二音節語を扱っているため、語彙化の視点を取り入れて語彙化の顕著な発展段階を実例の時代区分の参考にする。先行研究を概観して語彙化の発展過程を簡潔にまとめた研究には、董（2002；2011）がある。董（2011：9-10）では、殷商時代では単音節語が語彙体系の主流であったが、西周初期には複音節の造語法が萌芽し、春秋戦国時代に完成した。その結果、戦国時代は複数音節の語の数が大幅に増加した。後漢から二音節化の発展が加速し、唐代に至ると、二音節語を中心とする語彙体系が確立された。唐代以降の近世中国語では、二音節化の程度がさらに高まり、現代中国語では二音節語が主流となっていると述べられる。この概観では、先秦、後漢、唐代が区切り目として注目されている。ASACC の分類も参照し、本稿における中国語史の時代区分を以下（5）のように示す。厳密に言えば、境界線が曖昧な過渡期が存在すると考えられるが、中国語史の時代区分の細分化は本稿の主要な目的に当たらないため、先行研究とコーパスを参照して概ねの分類にすることを断っておきたい。

- (5) 上古中国語：先秦から前漢まで（～紀元前 221 年～8 年）
- 中古中国語：後漢から唐代五代まで（25 年～およそ 10 世紀中期）
- 近世中国語：唐代五代以降、清末まで（およそ 10 世紀末期～19 世紀中葉）
- 現代中国語：清末から現代（19 世紀中葉以降）

ASACC では各複合語をキーワードとして全範囲（上古～近世中国語の文献、ただし、成立年代不明の仏經などの文献を除く）を検索した結果、次の表 1 となる。収集したデータには重複の例が多数あったため、同一例、二重引用の例を削除した。ASACC は古代中国語において史書、思想著作、筆記、詩歌、戯劇、小説・話本、民歌など幅広いジャンルの文献を網羅的に収録しているが、上古中国語の文献では、史書や思想著作、中古中国語では、史書、唐詩、仏經、小説が多く、近世中国語の文献では小説・話本が圧倒的に多い。

表 1 各時期における複合語の使用例の数（2026 年 4 月時点）

| 調査対象 | 上古中国語 | 中古中国語 | 近世中国語 | 合計  |
|------|-------|-------|-------|-----|
| 心腹   | 27    | 103   | 386   | 516 |
| 腹心   | 38    | 245   | 53    | 336 |
| 股肱   | 56    | 237   | 38    | 331 |
| 爪牙   | 35    | 139   | 93    | 267 |

4.1 調査対象の概観

本稿の調査対象は、首領、心腹・腹心、股肱、爪牙である。『古漢語常用字字典』によれば、「首」は頭を意味するほかに、数多くの意味を拡張したので、多義である（e.g.かしらとする人、頂端、発端など）。「心」も多義語であり、心臓だけでなく、胸部、思想・意識・感情の総称などの意味を持ち、人間の生理活動・精神活動を司るものとして捉えられている。その他、「股」「肱」は太もも、上腕を表すが、「肱」が転じて手全体を表すことができる。「爪牙」は構成要素が人間の身体部位を指す一方、その身体部位の機能を生かした行為を表すこともできる（爪は抓む、牙は噛むを表す）。「股と肱」「爪と牙」のような単音節語の組み合わせは恣意的ではなく、構成要素同士が互いに関連しており、あるいは同じ身体語彙カテゴリーに属している（例えば、「股」と「肱」は「四肢」のカテゴリーに属する）ため、複合語として成立することが可能になると考えられる。

また、文脈の中で心腹・腹心、股肱、爪牙は連用することがあり、特に政治的・軍事的文脈においては、主君に対する忠誠や信頼の深さを象徴する語として機能する。例えば、(6)～(10)では、君主、諸侯いわゆる権力の最上位者に信頼される臣下や武将は股肱、腹心、心膂（むねと脊ぼね）、爪牙として捉えられる。(7)では、禹は夏朝開国の君主であり、四岳は禹の治水に功績があったため、堯によって呂の地に封じられ、姜という四岳祖先の炎帝の姓を賜った。天下を治める上で重要な補佐役として、禹の股肱と心膂、いわゆる股肱の臣と見なされる。

(8)では、古代中国の兵法書である『六韜』は周の太公望の撰とされるが、現存のものが魏晋時代の偽作と言われている（『大辞泉』を参照）。「龍韜」においては、君主の軍隊に属する腹心、股肱、爪牙などの役割が述べられる。例えば、腹心は様々な謀略を出して民衆の生命を保護する核心の人物であり、股肱は重要な職務を務め、内部から防御工事を推進し、国家を支えて守るものである。爪牙は国家を守護し、外部を攻撃する武将であるとみなされる。(9)では、前漢末年、王莽が統治する時期には、王舜、王邑は王莽の親族であり、人事任命の際に腹心という核心的な位置を与えられたと考えることができる。孫建が武将に任命され、爪牙の役柄を担った。また、(10)も同様に、匈奴を撃破した後、竇憲は親近な関係を持つ人々（鄧豐、郭璜ら）を心腹、敵と戦う武将（耿种、任尚ら）を爪牙として使わせた。

いずれの政治的・軍事的な文脈でも、これらの複合語は身体部位の機能に基づき、人間関係や社会的役割へと意味が拡張されている。つまり、首領と異なり、股肱、腹心、爪牙は、上古中国語の段階ですでに、単に身体部位の連用ではなく、比喩的に使われることもあったのである。

- (6) 及其亂也，諸侯貪冒，侵欲不忌，爭尋常以盡其民，略其武夫，以為己腹心、股肱、爪牙。  
（《春秋左傳・成公・傳十二年》）  
乱世には、諸侯は侵略の欲望に支配されてわずかな領地を争って自国の民を犠牲にします。各地の武人を奪って、自分の腹心、股肱、爪牙にして暴れまわる。
- (7) 昨四岳國，命為侯伯，賜姓曰姜、氏曰有呂，謂其能為禹股肱心膂，以養物豐民人也。（《國語・周語下第三》）<sup>4</sup>  
（堯は）四岳に國を賜い、侯伯（諸侯の長）に任命し、姜という姓、有呂という氏を授けた。これは、四岳が禹の股肱と心膂（心呂）となって、万物を養い、民を豊かにしたからである。
- (8) 太公曰：腹心一人：主潛謀應卒，揆夫消變，總攬計謀，保全民命。……股肱四人：主任重持難，修溝塹，治壁壘，以備守禦。……爪牙五人：主揚威武，激勵三軍，使冒難攻銳，無所疑慮。（《六韜・龍韜・王翼》）

<sup>4</sup> 『國語』韋昭（注）によると、「昨四岳國，命為侯伯」（堯以四岳佐禹有功，封於呂，命為侯伯，使長諸侯）「賜姓曰姜」（姜，四岳之先，炎帝之姓也。炎帝世衰，其後變易。至四岳有德，帝復賜之祖姓，使紹炎帝之後）「氏曰有呂」（以國為氏）「謂其能為禹股肱心膂，以養物豐民人也。」（肱，臂也。豐，厚也。氏曰：有呂者，以四岳能輔成禹功，比於股肱心膂。呂之為言膂也。）と注釈される。

姜太公は曰く：腹心となる一人は謀を潜め、卒然の事に応じ、つわものを管理し変異を除き、計略を統括し、民の命を保全することを主る。(中略)股肱となる四人は、重任や困難を引き受け、城の溝や堀を整え、壘壁をおさめて防御に備えることを主る。爪牙となる五人は、武威を誇示し、三軍を鼓舞し、困難や危険を冒して敵の精鋭に攻撃させ、ためらいのない状態にさせることを主る。

- (9) 於是附順者拔擢，忤恨者誅滅。王舜、王邑為腹心，甄豐、甄邯主擊斷，平晏領機事，劉歆典文章，孫建為爪牙。(《漢書・王莽傳第六十九上》)

こうしておのれに付き順う者は拔擢したが、逆らい恨む者はこれを誅滅した。王舜・王邑は莽の腹心となり、甄豐・甄邯は擊絶することを主り、平晏は機密をあずかり、劉歆は文章を典り、孫建は莽の爪牙となった。(小竹訳 1998 : 281)

- (10) 憲既平匈奴，威名大盛，以耿夔、任尚等為爪牙，鄧疊、郭璜為心腹。(《後漢書・竇融列傳第十三》)

竇憲は匈奴に勝った後、威名が天下に鳴り響き、耿夔、任尚などを自分の爪牙、鄧疊と郭璜を自分の心腹とした。

(引用元を示さない日本語訳と下線は筆者による)

次の節からは、それぞれの語の意味特徴を見ていく。分析の際に、中国語の詩歌や韻文は音声や押韻からの影響を受けていると考えられるため、基本的には叙述文の使用例を取り上げる。また、文献が成立すると考え得る年代の順に沿って使用例を配列する。翻訳の引用元を示さない限り、使用例の日本語訳が筆者の訳となる。日本語訳は『大漢和辞典』を参考にし、原文と訳文を対照するように直訳しているが、意識した場合もある。使用例の出典については、文献原本を確認できる場合は本稿末の付録に出典を記すが、確認できない場合は ASACC の「文献版本」で記載された文献によるものとし、付録にも記す。

## 4.2 心腹・腹心

上古中国語では、心腹・腹心の姿が多く文献に見られた。心腹・腹心は人間の重要な身体部位であり、心と腹(『漢語大詞典』)、あるいは胸と腹(『大漢和辞典』)を字義通りに意味する。「心」は心臓の形を象った漢字であるが、上古中国語の文献において「むね」を指した例がいくつかあった(e.g.「西施病心而曠其里(西施が胸を患って眉をひそめた)」「莊子・天運篇」)。「心」と「腹」の順序の互換可能性にもよれば、「心」と「腹」は意味の修飾関係ではなく、並列関係を成している。「心」が「むね」を指す可能性がある。いずれにせよ、心腹・腹心は上半身の重要な身体部位であると見なされている(e.g.心腹之害、心腹之患(重要な害を表す)、心腹之疾、心腹之病(治し難い致命的な病))。

次の例では、「腹心」は(11)のように字義通りに用いられた場合もあれば、(12)のように比喩的に用いられた場合もある。春秋戦国時代において、諸侯の「腹心」は身体部位というより、戦争や領地の争いのために諸侯の軍隊に就かせた、策略を巡らす者のほうが妥当であろう。『大漢和辞典』によると、「公侯腹心」は「諸侯が同心同徳の人として信頼する臣をいう」と意味する。注5と辞書の解釈を合わせて見ると、「腹心」は単に身体部位ではなく、諸侯に信頼される策略の臣として理解されていたと考えられる。

- (11) 孟子告齊宣王曰：君之視臣如手足，則臣視君如腹心。君之視臣如犬馬，則臣視君如國人。君之視臣如土芥，則臣視君如寇讎。(《孟子・離婁章句下》)

孟子が齊の宣王に向かって言った、「君主が臣下を自分の手足のごとくいたわり扱うと、臣下は君主を自分の腹や心のごとくたいせつに思います。君主が臣下を飼いや馬のごとく考えて礼敬の心がなければ、臣下も恩義を感じず君主を路傍の人のように思います。また、君主が臣下を土やあくた同然に扱えば、臣下も君主を仇や讐のように憎みみるものです」(宇野 2019 : 247)

- (12) 肅肅兔置。施于中林。赳赳武夫。公侯腹心。(《詩經・國風・周南・兔置》)<sup>5</sup>

<sup>5</sup> 「兔置」は『詩經』の「周南」の篇名であるが、うさぎを捕える網と意味する(『大漢和辞典』を参照)。後漢の鄭玄の箋によれば、「赳赳武夫、公侯腹心」については、「此兔置之人，於行攻伐，可用爲策謀之臣，使之慮事。亦言賢也。(この兔置の人(うさぎを捕まえる網を仕掛ける者)を、攻め討つにあたって、策略を巡らす臣

しっかりと張りつめたうさぎ網を、郊外の林にしつらえる。たくましくたけきおのこは、公侯の腹心。（石川 1997：29）

上古中国語の文献には心腹之疾・腹心之疾も多用されている。この表現は、身体の重要部位である「心腹」を用いて、治し難い病、内部に潜む致命的な病を表し、除きにくい敵も比喩的に表している。例えば、(13) (14) (15) は心腹の病を用いて、隣接の敵国が我が国にとって内部に隠れた致命傷のような存在であることをメタファー的に表現している。

- (13) 越在我，心腹之疾也，壤地同，而有欲於我。夫其柔服，求濟其欲也，不如早從事焉。（《春秋左傳・哀公・傳十一年》）

越はわが国にとって、胸や腹の病気です。縄ばりは同じであって、こちらに野心を持っております。あのように下から出て仕えるのは、野心を遂げようがためでございます。早いところ始末なさるがよろしゅうございます。（竹内訳 1968：492）

- (14) 夫韓不服秦之義，而服於強也。今專於齊、趙，則韓必為腹心之病而發矣。（《韓非子・存韓第二》）

そもそも韓は秦が正しきが故に臣服致しおるにあらず、秦が強ければこそ服従致しおります。今、秦がもっぱら齊・趙にかかりおれば、韓は必ず胸・腹の病いとなって痛みを起こさせましょう。（本田訳 2022：25）

- (15) 夫吳、越之勢不兩立。越之於吳也，譬若心腹之疾也，雖無作，其傷深而在内也。（《呂氏春秋・第二十三卷・知化》）

呉國と越國は勢不兩立（敵対する勢力が同時に共存できない状態）である。呉国にとって越国は心腹の病のような存在だ。体に症状が現れていなくても、その傷が深く内部に潜んでいるのだ。

一方、心腹・腹心の内部性、重要性も、「披心腹」「布腹心」のような表現に反映されている。心腹を披くという行為は、相手に容易に見せない真心や本心をさらけ出すことを描いている。これらの例もメタファー表現であり、心腹・腹心を容器に捉えていると考えられる。いわゆる〈心腹・腹心は容器〉であり、真心や本心はその容器の内容物である。こうしたメタファー表現からみると、心腹・腹心は単に心と腹の組み合わせではなく、全体的に心の内を意味するようになったと推測できる。

- (16) 若惠顧前好，徼福於厲、宣、桓、武，不泯其社稷，使改事君，夷於九縣，君之惠也，孤之願也，非所敢望也。敢布腹心，君實圖之。（《春秋左傳・宣公・傳十二年》）

もし前からの誼をお忘れにならず、祖先、厲・宣・桓・武に福をお求めなさいましてこの社稷を滅ぼさずに、改めてお仕え申すことを許して他の九県なみにしていただきますならば、これは君のお情け、またわたくしの願いでございまして、望むなどと申すべきことではありませぬ。つつしんで心の内をひろげました。よろしくお計らいくださいませ。（竹内訳 1968：158）

- (17) 今人主誠能去驕傲之心，懷可報之意，披心腹，見情素，墮肝膽，施德厚……（《史記・魯仲連鄒陽列傳第二十三》）

今、君主が傲慢な心を捨て、功臣に報いる誠意を抱き、心腹を披いて本心を示し、肝胆を抜け出して厚德を施してみれば（後略）

さらに、心腹・腹心是要地、急所を表すこともできる。(18)～(20) は、中山国が国の要地に位置することを「腹心」で表現すること、中原という核心的地域、辺境という周辺的地域を「四肢」と「腹心」にすること、外敵に国家内部の急所をさらけ出すことを描写している。これらの例から、身体概念と地域概念の対応関係が観察されるが、その対応関係が心腹の内部性・重要性、身体を中心に在ることに基づいていると考えられる。

---

として用い、事を慮らせることができる。また、（免置の人は）賢い者とも言う。）と述べられる（日本語訳は筆者による）。

- (18) 今中山在我腹心，北有燕，東有胡，西有林胡、樓煩、秦、韓之邊，而無彊兵之救，是亡社稷，奈何。《史記・趙世家第十三》  
いま中山は趙の腹心部にあり、北には燕、東には胡、西には林胡・樓煩・秦・韓があつて趙を取り巻き、しかも趙には強国のうしろ立てがない。これでは社稷を失うことになり、どうしたらよいだろうか。(小竹・小竹訳 (I) 1971 : 320)
- (19) 中國與邊境，猶支體與腹心也。夫肌膚寒於外，腹腸疾於内，内外之相勞，非相為助也。唇亡則齒寒，支體傷而心憊怛。故無手足則支體廢，無邊境則内國害。《鹽鐵論・卷第八・誅秦第四十四》  
中原と辺境は手足と腹心のようなだ。皮膚が外で冷え、腹腸が内で病む。内と外が病んでおり、互いに助けとなるのではない。唇がなくなると歯が冷えるように、手足が傷つくと心がかなしみ痛む。ゆえに、手足がなければ身体が壊れ、辺境が失われれば、国内も禍いにさらされるのだ。
- (20) 故兵革者國之用，城壘者國之固也。而欲罷之，是去表見裏，示匈奴心腹也。《鹽鐵論・卷第八・和親第四十八》  
兵器や武具は国の武力で、城壁や要塞は国の防衛の要だ。それを廃止しようとするのは、外部の防御を取り除き、敵の匈奴に心腹をさらけ出すようなものだ。

中古中国語の段階では、要地・急所を表す「心腹」の例、腹心の部下を表す「腹心」の例が多く見られるようになった。(21)～(24)では、(21)は「心腹」が中心の要地として、周辺的地域を支配するという戦略的な重要性を指摘している。(22)も、四肢の病と心腹の病の対比を通じて、国の内憂外患の状態を表しており、四肢の外部性、心腹の内部性を強調している。また、(23)は国家の領地(天下)を人間の身体に捉えており、「腹心」を中心的な統治地域、「四肢」を周辺の統治地域に見立てている。

- (21) 歙與征虜將軍祭遵襲畧陽，因保其城。上聞甚悅。左右怪上數破大敵，今得小城，何足以喜。然上以畧陽囂所依阻，心腹已壞，則制其支體易也。《東觀漢記・卷十一・来歙傳》  
来歙と征虜將軍の祭遵と一緒に畧陽を襲って、その城を守った。上(帝)はそれを聞いて喜んだ。左右は、帝が何回も大敵を打ち破ってきたので、今、小さな城を得たことが喜びに値するだろうかと惑った。だが、帝は、隗囂が畧陽を核心の要塞として支配していたので、すでにその心腹が壊れたから、四肢を制圧することが容易になるのだ、と。
- (22) 今寇賊在外，四支之疾；内政不理，心腹之患。《後漢書・列傳第五十六・陳蕃》  
今、寇が外にいるのが四肢の病のようだ。内政が整わないのが心腹の病のようだ。
- (23) 夫天下猶人之體，腹心充實，四支雖病，終無大患；今兗、豫、司、冀亦天下之腹心也。《三國志・魏書・國志十六・杜畿傳》  
天下というのは人の身体のようなものである。腹心が充実していれば、四肢に病気があっても、大きな禍にはならない。現在、兗州、豫州、司州、冀州はまさに、天下の腹心なのである。
- (24) 往年西征，劉鍾危殆，前年劫盜破廣州，人士都盡。三吳心腹之内，諸縣屢敗，皆由勞役所致。《宋書・列傳第二十四・鄭鮮之》  
往年の西征では劉鍾が危険に陥り、一昨年に盗賊が広州を攻め落として官吏や民衆が全滅した。三吳(地域)の心腹では、諸県が度々敗北した原因は労役にある。

中古中国語の史書においては、以下で示したように、人の役柄を示す「腹心」の例が多かった(245例の中、約68%を占める)。(25)～(30)をまとめて見ると、君主の心腹・腹心となる臣下は、知識人でありながら、重要な職務に務め、政治の機務に関与し、知恵建てをする者である。このような、重きをなす内部の人は外部の諸侯王と結交し、政治機密を漏洩したり、君主を裏切って下剋上したりすると、国に重大な禍いをもたらすことになる。

(27)では、「人為腹心，出作股肱」というように、人間内部の腹心と外部の股肱を、朝廷の腹心と股肱に対応づけている。周瑜、陸公、魯肅、呂蒙は、三國時代東呉の有名な英傑で、腹心の臣と股肱の臣であり、朝廷で謀略を出し、外で国を守る。ここでの「股肱」は有力な武将と解釈することができる。

- (25) 唯明主躬萬機，選同姓，舉賢材，以為腹心，與參政謀，令公卿大臣朝見奏事，明陳其職，以考功能。《漢書・蕭望之傳第四十八》  
 ただ明主というものは、政務万端をみずから行ない、同姓宗室の人を選び、賢材を挙げ用い、これを腹心として政謀に参与させ、公卿大臣を朝見して事を奏上させ、その職分を明らかに陳べさせて、功績能力を考えるものであります。(小竹訳 1998 (6) : 557)
- (26) 初，嚴助之使南越，淮南王與相結。及淮南王來朝，厚賂遺助，交私論議。廷尉張湯以為助腹心之臣，而外交諸侯，當誅。《前漢紀・前漢孝武皇帝紀三卷第十二》  
 最初、嚴助は南越に使節として行った際に、淮南王と結交した。淮南王が朝見しに来た時、嚴助に大量の賄賂を送り、私的に交際して(政事を)議論した。廷尉の張湯は嚴助が腹心の臣として外部の諸侯と結交したことが罪なので、殺すべきだと考えている。
- (27) 於是張昭為師傅，周瑜、陸公、魯肅、呂蒙之儔，入為腹心，出作股肱。《三國志・吳書・國志四十八・孫皓》  
 そこで、張昭が帝王(孫權)の師匠として扱われており、周瑜、陸公、魯肅、呂蒙といった人たちは朝廷の内部にいと、腹心となり、外部に出ると、股肱となる。
- (28) 宜授心腹人為吏部尚書，參同選舉。《世說新語・卷上之下・政事第三》  
 (信頼できる) 心腹を吏部尚書に任命し、官吏の選抜に関与させることが望ましい。
- (29) 案中興之際，大將軍本以腹心受伊、呂之任，而元帝末年，遂攻京邑，明帝諒闇，又有異謀。是以下逆上，腹心內爛也。《宋書・志第二十一・五行二》  
 中興の時期を考察してみると、大將軍(王敦)は本来、(帝王の)腹心として、商代の伊尹、周代の呂尚(有名な腹心の臣)のように重任を託されたが、晋元帝の末年について京邑を攻め、晋明帝が喪に服している際に、また異謀を立てた。これは下剋上であり、腹心が内部から腐敗したのだ。
- (30) 元徽末，世祖在郢州，欲知京邑消息，太祖遣諶就世祖宣傳謀計，留為腹心。《南齊書・列傳第二十三・蕭諶》  
 元徽の末年、世祖が郢州にいた時、京邑に関する情報を知りたかった。太祖は蕭諶を世祖のもとへ行かせ、謀計を伝えさせ、彼を残して世祖の腹心として仕えさせた。

最後に、近世中国語では、上古中国語と中古中国語で拡張した意味を引き継いだが、心腹は腹心より、腹心の部下/人を表す例が圧倒的に多くなった(心腹 386 例の中、約 78%を占める)。「心腹之友」のような表現も見られるようになり、「互いに心の中を打ち明ける友」を比喩的に表している。現代中国語でも、「心腹」は「腹心の部下/人」を中心に使われている。

- (31) 其次邊及腹心州軍，利於滋穀食，教民戰，為持久取勝之策。《張載集・邊議》  
 続いて、辺境および腹心の州軍については、穀物の生産を促進し、民衆に武を教えることは、長続きの勝利の策となる。
- (32) 黃文炳稟說道：文炳夜來渡江到府拜望，聞知公宴，不敢擅入，今日重復拜見恩相。蔡九知府道：通判乃是心腹之交，逕入來同坐何妨。《水滸傳》第三十九回)  
 黄文炳は「この文炳は、夜分に川を渡って貴邸に伺いましたところ、ご宴会中とのことでお邪魔できず、本日改めて伺いさせていただきました。」と謹んで申し上げた。蔡九知府は「通判とは心腹の友ですから、そのまま入って同座しても構いませんでしたのに。」と言った。
- (33) 那人姓劉名青，綽號劉千斤，乃汪革手下第一箇心腹家奴，喝道：賊子那里走。《喻世明言》第三十九卷)  
 その人が劉青という名前、劉千斤と呼ばれており、汪革配下の一番の心腹の家僕である。彼は「賊め、どこに逃げるんだ!」と叫んだ。
- (34) 萬里向蒙不殺之恩，收為廝養，委以腹心，人非草木，豈不知感。《醒世恆言》第十九卷)  
萬里は命を許される恩を受け、召使いとして養われ、腹心の任を委ねられた。人は草木ではないのだから、恩を感じずにいられるだろうか。

#### 4.3 股肱

『漢語大詞典』(第二版第六卷)によれば、「股肱」の第一項目の意義は「太ももと腕」である(『古代漢語詞典』では「太ももと上腕」と解釈される。『古漢語常用字字典』にもよると「肱」が

肩から肘までの部分を指すので、「上腕」の方が妥当であろう)。その事例には「股肱惟人，良臣惟聖」(「尚書・説命下」とある。この古文に対して「手足具乃成人，有良臣乃成聖(手足が備わってこそ人となり、良き臣下がいてこそ(君王が)聖人となる)」という孔傳の注解が記される。この注解からみると、「股と肱」は特定の部位を表すだけでなく、転じて「手と足」をメトニミー的に表す場合もある。また、手足が人間の身体を支えていることで、人間が人として生きることができる。同様に、良き臣下は手足のように君主を支えているからこそ、君主が聖人になることが可能であると示唆されている。以下は股肱の意味変化を時期別に見ていきたい。

- (35) 昔周公、大公股肱周室，夾輔成王。(《春秋左傳・僖公・傳二十六年》)  
昔、周公(周公旦)と大公(姜太公)は周王朝を股肱のように輔佐し、左右から周成王をはさみたすけていた。
- (36) 榮成子曰：子股肱魯国，社稷之事，子实制之。(《國語・魯語下》)  
榮成子曰く：貴方(季武子)は魯国を股肱のように輔佐し、国家の事項を実際に処理しています。

上古中国語では、股肱は字義通りの意味を表す例のほか、比喩的に使われた例もあった。例えば、(35)では、「股肱」が動詞として「輔佐、護衛する」の意味で用いられたと考えられるが、「夾輔(左右からはさみたすける)」と同時に使われることで、周公旦と姜太公が人の股と肱のように、左右から中心の周成王を輔佐していたことが読み取れる。(36)も(35)と同じように解釈可能である。「股肱」は名詞の身体部位にとどまらず、動詞となっていく過程において、手足の生理的特徴と機能に基づき、メトニミーによって輔佐、護衛するという全体的な意味を生み出したと考えられる。名詞の場合では、(37)と(38)のように、具体的な身体部位から、君主を輔佐する将軍・宰相、執政輔佐の臣へとメタファー的に表している。将軍・宰相のような股肱の臣は、あらゆる国家の政事や軍事において最も頼みとなる輔佐の臣である。また、輔佐の臣だけでなく、「股肱」の特徴に基づき、メタファーによって、「股肱郡(帝京の輔翼となる郡)」のように、帝京を護衛する肝腎な要地として捉えられることもある(e.g.(39)(40))。

- (37) 晉荀盈如齊逆女，還，六月，卒于戲陽。殯于絳，未葬。晉侯飲酒，樂。膳宰屠蒯趨入，請佐公使尊，許之。而遂酌以飲工，曰：……君之卿佐，是謂股肱。股肱或虧，何痛如之？女弗聞而樂，是不聰也。(《春秋左傳・昭公・傳九年》)  
晉の荀盈が齊にゆき妻を迎え、帰る道で、六月、戲陽で亡くなった。絳で棺をすえたが、まだ葬式がすまぬうちに、晋侯は宴をもよおし音楽をやらせた。膳宰の屠蒯がいそいで宴の席に入り、給仕の手伝いをさせていただきたいと願い、許された。するとさっそく酌をして楽人に飲ませ、これに言った。「(中略) ご主人の大臣は、これを手足という。手足が一つなくなったら、これほどお苦しいことがあるだろうか。お前はこう聞かされてもまだ音楽を奏するならば、つんぼといわねばならない」(竹内訳 1968 : 364)
- (38) 十月，昭王病於軍中，有赤雲如鳥，夾日而蜚。昭王問周太史，太史曰：是害於楚王，然可移於將相。將相聞是言，乃請自以身禱於神。昭王曰：將相，孤之股肱也，今移禍，庸去是身乎！(《史記・楚世家第十》)  
十月、昭王は軍中で病んだ。空に赤い雲があって、さながら鳥のように、太陽をはさんで飛んだ。昭王は周の太史に問うと、太史は、「これは王に禍いをなします。しかしその禍いを将軍・宰相に移すことができます」と言った。将相たちはこれを聞くと、神に祈って自ら身代りになりたいと請うたが、昭王は、「将相はわしの股肱じゃ。いま禍いを移そうとて、どうしてわが身(注：股肱)を棄てられようか」と言って聴かなかった。(小竹・小竹訳 1971 (I) : 288)
- (39) 中牟無令，晉平公問趙武曰：中牟，三國之股肱，邯鄲之肩髀，寡人欲得其良令也，誰使而可？(《韓非子・外儲說左下第三十三》)<sup>6</sup>

<sup>6</sup> 竹内(1964 : 537)は、『韓非子』の刊本「吳氏覆刻宋乾道本」は「吾」を「三」に誤ると指摘した。例(39)で用いた原本「黃蕘圃校宋本」は、清代の黃丕烈によって、「宋乾道本」(最古の『韓非子』の版本)を写した「影宋鈔本(錢氏述古堂による)」を基にして校訂を加えた写本である。黃蕘圃校宋本も吳氏覆刻宋乾道本も同様に宋乾道本を底本としているため、例(39)の「三国」が誤りであり、「吾国(わが国)」であった可能性が高いと考

中牟（晋の地）には県令がない。晋の平公が趙武に問うた、「中牟はわが国の肝腎かなめ、邯鄲（晋の地、後の趙の都。河北省邯鄲県）の出城に当たる。わしはそこにしっかりとした県令を置きたい。誰をやればよいかな？」（本田訳 2022：374）

- (40) 上默慙，良久曰：河東吾股肱郡，故時召君耳。布辭之官。（《史記・季布樂布列傳第四十》）  
主上はしばらく黙然としていたが、やがて、「河東はわが股肱と頼む郡である。それゆえ、  
とくにおまえを召したまでのことだ」と言ったので、布は辞して帰任した。（小竹・小竹訳  
1971（II）：229）

中古中国語では、「股肱」は上古中国語で拡張した意味を引き継いだ。以下(41)～(44)では、君主の股肱としての重臣は執政を輔佐して、賢材を挙げ国を治めるものであり、深く信頼されているので、(43)のように、先君から幼君を託されることすらあった。股肱之力という表現は、君主を支える重臣の力を意味する。股肱之力を尽くすことは、主君に忠実な心を持ち、臣下として出すべき力を竭くすことを表している。また、(42) 君主は国の頭として、手足としての臣下とは相俟って一体になっているという論述もあった。これについては、股肱（手足）は身体の枝で、身体の平衡を支えている部位であるため、国政を整えるための重要な輔佐の臣である。君主は政令や政策を打ち出す際に、それを執行する信頼の臣下がなければ、うまく進まない。一方、知恵や権力の最上位にある頭がなければ、手足があっても人は動けなく、国は滅びることになると考えられる。

- (41) 朕獲保宗廟，以微眇之身託于士民君王之上，天下治亂，在予一人，唯二三執政猶吾股肱也。（《漢書・文帝紀第四》）  
朕は宗廟を保つことを得、微小の身を士民・君主の上に託し、天下治乱の責は予一人にかかっており、ただ二、三の執政者がなおわが股肱として頼むところである。（小竹訳 1997：120）
- (42) 古之制名，必繇象類，遠取諸物，近取諸身。故經謂君為元首，臣為股肱，明其一體，相待而成也。是故君臣相配，古今常道，自然之執也。（《漢書・魏相丙吉傳第四十四》）  
いにしへは名称を制定するのに、かならず同類をもってし、遠くはこれを物に取り、近くはこれを身に取った。それゆえ、經書には君のことを元首といい、臣を股肱といい、両者が一体であり相待って成り立つことを明らかにしたのである。それゆえに君と臣とを配えあうのは、古今の常道であり、自然の勢いである。（小竹訳 1998（6）：392）
- (43) 吐延身長七尺八寸，勇力過人，性刻暴，為昂城羌酋姜聰所刺，劍猶在體，呼子葉延，語其大將絕拔渥曰：……今以葉延付汝，汝竭股肱之力以輔之，孺子得立，吾無恨矣。（《宋書・列傳第五十六・鮮卑吐谷渾》）  
吐延は身長七尺八寸あり、勇氣と力は人並み以上だが、性格はむごく乱暴であった。昂城の羌の酋長・姜聰に刺され、劍がまだ体に刺さったままで、彼は息子の葉延を呼び、大將の絶拔渥にこう言った。「（中略）今、葉延をお前に託す。お前は股肱の力を尽くして彼を輔佐してくれ。この子が自立して後を継ぐことができれば、吾はもう恨むことはないんだ。」
- (44) 臣聞王臣之節，竭智盡公，以奉其上。居股肱之任者，申理冤滯，薦達羣賢。（《南齊書・列傳第三十二・崔慧景》）  
臣はこう聞いております。王の臣としての操守は、知恵を竭くし、公のために尽くして主上に仕えることにあるという。股肱の重任を担う者は、理不尽な抑圧や無実の罪を蒙っている者の抑圧を取り除き、朝廷に有能な人材を推薦するものです。

近世中国語では、「股肱」も引き続き、股肱の臣、（親近な関係を持つ）手足として慣用的に使われていた。一方、「股肱」の 38 例の中で、字義通りの用法がほとんど見えなくなった。こうして「股肱」は慣用的意味を中心に用いられる二音節語として定着したと考えられる。

- (45) 頼爾二三股肱，實左右朕。（《五代史平話・周史平話》）  
あなたたち股肱二、三人が、朕の左右で輔佐しているおかげだ。

えられる。

- (46) 自此梁山泊十一位頭領聚義，真乃是交情渾似股肱，義氣如同骨肉。(《水滸傳》第二十回)  
これ以降、梁山泊の十一人の頭領は大義のために力を合わせ、ほんとうにその交情は手足のごとく、義俠心は骨肉のようであった。(井波訳 2017 (一) : 627)
- (47) 宋江乃言道：小可今日權居此位，全賴眾兄弟扶助，同心合意，同氣相從，共為股肱，一同替天行道。(《水滸傳》第六十回)  
宋江は口を開いて言った。「てまえは今日かりにこの地位についたが、すべて兄弟衆のおかげだ。心を一つにし、気持ちを合わせて、より集い、共に股肱となつて、いっしょに天に替わつて道を行おう。」(井波訳 2017 (三) : 627-628)

#### 4.4 爪牙

『古漢語常用字字典』では、爪は手または足の爪、牙は奥歯を意味するが、転じて抓む、嚙むを表すこともあると解釈される。上古中国語では、「牙」が出る前に、牙齒の総称を表す「齒」があったが、馮 (2008) によると、春秋時代で「牙」が出現して以降、「齒」は前歯を意味するようになり、「牙」は奥歯を意味するようになったと述べられる。「爪牙」は人、動物の爪と奥歯を表すが、勇士をメトニミー的に表すこともできる。例えば、「詩経・小雅」における「祈父。予王之爪牙。」が挙げられる(『漢語大詞典』を参照)。

以下の例のように、人・動物の爪牙を表す例 (e.g.(50)) があるが、爪牙の鋭さ、外部を攻撃して自身を守る特徴に基づき、君主など国の上位者に仕えて国を護衛する臣下を表す例も観察される。具体的には、(48) は「謀臣」と「爪牙」を並行して君主の為政にとって必要な臣下を示している。(49) 『韓非子』は、虎豹の爪牙を用いて君主の強い勢威に喩えている。虎や豹が自身の爪牙に頼るように、君主は権勢や重臣をしっかりと掌握していなければならない。もし権勢を臣下(例えば、宋国の子罕、斉国の田常)に奪われて取り返さなければ、君主は「爪も牙もない虎」と化し、ついに滅びてしまうことになる。君主のその爪牙は君主にとって必要なものであり、武器として使えるものであると考えられる。また、(50) は、力強い虎や豹と「爪牙之利」との共起を通して、「爪牙の鋭さ」を「攻撃力の強さ」に結びつけている。

こうした例からみると、上古中国語では、「爪牙」は、動物の鋭い爪牙から、転じて、国や君主を守る、力強い臣下を表すようになったと考えられる。この意味拡張の過程においては、爪牙はメトニミーによって攻撃力の強い人を表すようになり、さらにメタファーによって、身体領域から(国のような)政治的・軍事的組織の領域へと転じ、国や君主を守る立派な臣を表す意味を拡張した。

- (48) 夫雖無四方之憂，然謀臣與爪牙之士，不可不養而擇也。譬如衰筮，時雨既至必求之。(《國語・越語上》)  
四方の国と戦争の憂患がなくとも、知謀の臣と豪傑の勇士とは、平素から大切に選り抜かなければなりません。それは、譬えばみのかさのようなもので、時雨が降ってくれば、必ずほしくなります。(大野 1978 : 800)
- (49) 虎豹之所以能勝人執百獸者，以其爪牙也，當使虎豹失其爪牙，則人必制之矣。今勢重者，人主之爪牙也，君人而失其爪牙，虎豹之類也。宋君失其爪牙於子罕，簡公失其爪牙於田常，而不蚤奪之，故身死國亡。(《韓非子・人主第五十二》)  
虎や豹が人間にも勝ち、百獣を取って食うことのできるわけは、その爪や牙の強いためである。もし虎や豹が爪や牙を失ったならば、人間は必ずこれを(たやすく)捕えるであろう。勢威の強いことは君主にとって虎豹の爪牙のごとき物なのである。君たる者がその爪牙を失えば、虎豹の場合と同様である。すなわち、かの宋君はその臣、子罕に対して爪牙を失い、斉の簡公は田常に対して爪牙を失い、かつ失って早く取り戻すことをしなかったから、ついに身は殺され国は奪われたのである。(竹内 1964 : 891)
- (50) a. 蚯蚓無爪牙之利，筋骨之強，上食埃土，下飲黃泉，用心一也。(《荀子・勸學篇第一》)  
みみずには鋭利な爪や牙も強靱な筋肉や骨格もないのに、地表の腐土を食べ、地中深くもぐって地下水を飲むこともできるのは、心を一点に集中するからである。(澤田・小野訳 2001 : 10)
- b. 人無筋骨之強，爪牙之利，故割革而為甲，鑠鐵而為刃。(《淮南子・兵略訓》)  
人間には強い筋骨も、鋭い爪牙もないので、皮革を割いて甲を作り、鉄を融かして刃を作ったのであった。(池田編訳 2012 : 285)

c.大夫曰：虎兕所以能執熊羆、服群獸者，爪牙利而攫便也。（《鹽鐵論・卷第九・險固第五十》）

大夫曰く：虎や野牛が熊や羆を捕まえ、多くの獸を服従させることができるのは、その爪牙が鋭く、獲物をつかみ取るのに長けているからである。

一方、「爪牙」は勇士や信頼される臣下だけでなく、権勢ある上位者の手先でもある。例えば、『史記』の「酷吏列伝」における例では、王温舒に仕える役人には、郡中の勇士、冠をかぶった虎のような酷吏が爪牙（手先）として使われた。爪牙吏という語は、「暴威を振う官吏。権勢ある者に阿附して暴虐を逞しゅうする小役人。」と解釈される（『大漢和辞典』）。『史記』以降、中古中国語の文献には、手先の意味で用いられた「爪牙」の例もあった（e.g.(55)）。

- (51) 擇郡中豪敢任吏十餘人，以為爪牙，皆把其陰重罪，而縱使督盜賊，快其意所欲得。此人雖有百罪，弗法。（《史記・酷吏列傳第六十二》）

（王温舒は）郡中の豪強果敢な人物十余人をえらんで役人とし、自分の手先に使った。みな彼らのかくした重罪の確証を握り、これをゆるして盜賊を督察させたのである。捕えたいと思っていた盜賊を捕えて、自分を満足させてくれる者があれば、たとえその者に百罪があろうとも罰するようなことはしなかった。（小竹・小竹訳 1971(II)：375）（訳文の中、括弧内の説明は筆者による）

- (52) 姦猾窮治，大抵盡靡爛獄中，行論無出者。其爪牙吏，虎而冠。於是中尉部中中猾以下皆伏，有勢者為游聲譽，稱治。治數歲，其吏多以權富。（《史記・酷吏列傳第六十二》）

姦悪狡猾のものどもは厳しく吟味され、たいていみな獄中で拷問されて、体が腫れただけ、控訴して出獄できる者がなかった。手先の役人は、冠をかぶっている虎にすぎなかった。このため中尉の部内の、ほどほどに狡猾なものやそれ以下の者は、みな温舒の扱いに平伏し、勢力あるものはことさらに温舒の名声を言いふらし、その治績をほめた。このようにして数年たち、部下の多くは権力を利用して財産をつくった。（小竹・小竹訳 1971(II)：376）

中古中国語の文献では、(53) (54) のように、戦うごとに勝ち、敵を降伏させる有能な将軍は「国の爪牙」とされており、重要視されていた。また、唐代『晉書』の例 (56) (57) には、股肱と爪牙を並行して出来た「股肱爪牙之佐」、それと対照する「文武熊羆之臣」という表現が見られる。「股肱」だけでなく、「爪牙」も晉朝の王室を輔佐して国を治める大臣である。「股肱と爪牙」は文武両道を通じた才能を有し、熊と羆のように強い力を持っていると考えられる。(55) は、多くの逆賊を集めて自分の手先とすることを表している。これは上記『史記』の例と同じ意味である。

- (53) 太中大夫谷永上疏訟湯曰：臣聞楚有子玉得臣，文公為之仄席而坐；趙有廉頗、馬服，彊秦不敢窺兵井陘；近漢有郅都、魏尚，匈奴不敢南鄉沙幕。由是言之，戰克之將，國之爪牙，不可不重也。（《漢書・傳常鄭甘陳段傳第四十》）

太中大夫谷永が上疏し、湯のためその無実を雪ごうとして言った。「臣はこう聞いております。楚に子玉得臣という者がいて、文公は彼のため自分の席を側めて坐した、また趙に廉頗・馬服の二将軍がいたため強秦もあえて兵を井陘に窺わせなかった、と。近くは漢に郅都・魏尚がいて、匈奴もあえて南のかた沙漠に向かおうとしなかったとのことです。こうしたことから言えば、戦勝の将は国家の爪牙であり、尊重しなくてはなりません。」（小竹訳 1998 (6)：224）

- (54) 合肥之役，遼、典以歩卒八百，破賊十萬，自古用兵，未之有也。使賊至今奪氣，可謂國之爪牙矣。（《三國志・魏書・國志十七・張遼》）

合肥の戦いでは、張遼、李典は歩兵八百人をもって敵の十万人を討ち破った。昔からこのように兵隊を用いることはなかった。これにより、敵は今なお戦意を失っている。（この二人は）まさに国の爪牙と言えるのである。

- (55) 收羅羣逆，皆作爪牙，撫接優密，過於義士。（《宋書・列傳第四十三・吳喜》）

多くの逆賊を味方に引入れ、みな爪牙とした。彼らをやすんじ近づけ、手厚く親密に遇し、義士以上に優遇していた。

- (56) 惟爾股肱爪牙之佐，文武熊羆之臣，用能弼寧晉室，輔余一人。（《晉書・帝紀卷第六・元

帝》)

あなたたち股肱爪牙のような輔佐の臣、文武を通じた熊羆のような勇猛な臣下がいたからこそ、晋の王室を輔け安らかにし、余一人を輔佐することができたのだ。

- (57) 臣聞皇代之興，必有爪牙之佐，扞城之用，帝王之利器也。(《晉書・列傳第三十八・紀瞻》)  
臣は、今の御世の興盛には爪牙の輔佐が必須だと聞き、爪牙は城を護衛する役割を果たしており、帝王の鋭利な兵器なのです。

近世中国語の話本・小説では、動物の爪と牙を意味する例、王侯貴族の勇士や武臣を意味する例も引き続き用いられていた。中では、明清の小説(40例)において、悪勢力の手先を意味する「爪牙」の例が約半分を占めている(e.g.(58)(59))。心腹・腹心、股肱とは異なり、爪牙は『史記』で「手先」を意味する例が観察され、それ以降、中古中国語の文献でしばしば見られ、明清の小説においてはそのような例が増えてきた。「爪牙」は、勇ましい臣下を表す意味から、次第に「悪勢力の手先」を表す意味が主流になりつつあったと考えられる。この意味変化に関しては、「爪牙」の役割に関する認識が変わったが、爪牙の鋭さに関する認識には変わりがなかったと考えられる。例えば、上古中国語から中古中国語までの文献では、爪と牙は人や動物の身体部位の中で最も鋭い部位とされており、政治的・軍事的文脈においては「爪牙」が基本的に国を守る重臣として認識されていたが、上位者に阿附する、爪牙としての役人を表す例も少々あった。近世中国語の話本・小説では、「爪牙」が「手先」を表す多くの例の中で、(59) 虎の悪を人の悪に見立てる例のように、獲物を取ったり人を傷つけたりするために、虎や豹は爪や牙を鋭い武器として用いることから、自分の欲望や上位者の命令によって駆使された「爪牙」は、他人を攻撃して悪事を振る手先として認識されている。

- (58) 那時彌遠手下共有三凶、四木在於要路，做他的爪牙。……彌遠手下有了這三凶、四木，凡是賢人君子都一網打盡，貶的貶，竄的竄，死的死，誰人敢道一個不字？(《西湖二集》卷七)  
その時、史弥遠の配下には「三凶」「四木」という人たちが要職についており、彼の手先となって悪事を働いていた。史弥遠はこの三凶、四木を手先に使わせたことで、賢人君子たちをことごとく一網打尽にした。左遷される者は左遷され、追放される者は追放され、死ぬ者は死んだ。いったい誰が「否」と言えるだろうか？
- (59) 韓旭聞之，不勝驚異，拜謝曰：蒙代除去大仇，恩莫大焉。斬草必除根，求并除之。雲程曰：再除何難，但某念舊情，公何忘前恩？今虎無爪牙，焉能再展惡？(《閩都別記》第二一六回)  
韓旭はこれを聞くと、たいそう驚き、拝礼して「私の大敵を取り除いてくださり、そのご恩はこの上ありません。『草を刈るなら根まで除け』と言うように、どうか残りの敵も一緒に除いてください。」と言った。雲程はこう言った。「また取り除くことは難しくはない。ただ、私は昔の情を思っているが、あなたはなぜ以前の恩を忘れたのか。今や虎は爪牙を失っているから、どうして再び悪事を振ることができようか？」

#### 4.5 まとめ

4.1 節から 4.4 節まで心腹・腹心、股肱、爪牙の例を通時的に分析してきた。この4語が代表する者は権力の最上位者に親近な関係を持ち、信頼されていることが共通している。「心腹・腹心」は国や王侯貴族の内部の謀臣であり、「股肱」は国の重任を担う、宰相のような重臣であり、外に出ると、将軍の役割を担う。それに対し、「爪牙」は、文臣・武臣でも、国を治めるうえで必要なものであるが、爪と牙の特徴に基づき、武臣や武將として用いられる場合が多い。また、「爪牙」は心腹・腹心、股肱と異なり、上位者の手先を意味することもできる。それぞれの具体的な役割分担は次の(60)のようにまとめられていると考えられる。

- (60) (再掲) 太公曰：腹心一人：主贊謀應猝，揆天消變，總攬計謀，保全民命。……股肱四人：主任重持難，修溝塹，治壁壘，以備守禦。……爪牙五人：主揚威武，激勵三軍，使冒難攻銳，無所疑慮。(《六韜・龍韜・王翼》)  
姜太公は曰く：腹心となる一人は謀を潜め、卒然の事に応じ、つわものを管理し変異を除き、計略を統括し、民の命を保全することを主る。(中略) 股肱となる四人は、重任や困難を引き受け、城の溝や堀を整え、壘壁をおさめて防御に備えることを主る。爪牙となる五人は、武威を誇示し、三軍を鼓舞し、困難や危険を冒して敵の精鋭に攻撃させ、ためらい

のない状態にさせることを主る。 (＝(8))

(60) で示したように、「心腹・腹心」は、諸々の謀略を出して急変に应变し、民の命を保全させる重要な謀臣であり、「股肱」は重任を担い、難事を処理し、国を守護する重臣であり、「爪牙」は国や君主を守るための武力・権力行使の具現化であるということは特徴的である。ほかに、「心腹・腹心」は内面的な親密さ、国の核心要地としての重要性を強調し (e.g.(16)~(24),(25)~(30))、「股肱」は手足の協調性を借りて君主を左右で輔弼することを特徴づけ、「爪牙」は虎豹の爪牙のような、外部を攻撃して自身を守る鋭利な武器でありながら、内部を輔佐する有力な臣下 (e.g.(49)(53)(54)(56)(57))、あるいは悪勢力の手先 (e.g.(51)(52)(55)) を比喩的に表している。次節は、4 節までの分析をまとめ、これらの語の通時的意味変化の特徴を考察する。

5. 考察

まず、上古中国語から現代中国語まで、首領をはじめ、心腹・腹心、股肱、爪牙といった二音節語の通時的意味変化の顕著な特徴をまとめると、次の表 2 となる (△は少量の例 (10 例以下) があることを示し、斜線は今回の調査で未発見のことを示し、存在しないとは言えない)。現代中国語の例に関しては、主に北京語言大学中国語コーパス (BCC 語料庫) の「多領域」で検索して使用例を観察し、調査対象語のどの意味が現代中国語で慣習的に使われているかを判断する (例えば、現代中国語における「爪牙」の 451 例にはほとんどの例が「手先」を表している)。

表 2 首領、心腹・腹心、股肱、爪牙の通時的意味変化

|             | 意味          | 上古中国語 | 中古中国語 | 近世中国語 | 現代中国語   |
|-------------|-------------|-------|-------|-------|---------|
| 首領 (丁 2006) | 首と頸部→命      | ○     | ○     | △     |         |
|             | 集団の首脳       |       | ○     | ○     | 常用      |
| 心腹・腹心       | 心 (または胸) と腹 | ○     | ○     | △     |         |
|             | 心の中の真心・本心   | △     | ○     | ○     |         |
|             | 急所、核心な要地    | △     | ○     | △     | 常用 (腹心) |
|             | 腹心の部下・人     | △     | ○     | ○     | 常用 (心腹) |
| 股肱          | 太ももと上腕→手足   | ○     | △     | △     |         |
|             | 手足のような部下・人  | ○     | ○     | ○     | 常用      |
|             | 都や腹心を守る要地   | △     | △     | △     |         |
| 爪牙          | 人・動物の爪と奥歯   | ○     | ○     | △     |         |
|             | 国・主君を守る臣下   | △     | ○     | △     |         |
|             | 悪勢力の手先      |       | △     | ○     | 常用      |

表 2 をみると、この 5 語は上古中国語では字義通りの意味から比喩的意味への変化が芽生え、中古中国語では比喩的意味が多く用いられた。近世中国語になると、これらの語は字義通りの意味を表す例が減少し、人の役柄を表す意味が慣用的になりつつあったという傾向が観察される。このような変化は、董 (2002 : 7-8) による語彙化の顕著的な変化段階と概ね対応している。中古中国語では、語彙化の程度が高まり、単音節語から大量の二音節語が産出された結果、フレーズから二音節語へと変化した複合語の数も増えてきたと推測する。遅くとも、唐代までこの 5 語が人の役柄を表す二音節語として成り立ったと考え得る。中古中国語においては、メタファーやメトニミー、連想や類推などの認知プロセスを経て、2 つの構成要素の意味が融合したり一方に偏ったりして形成された全体的意味を表すものが意味のまとまりの語として生まれたのは自然であろう (丁 (2006) も参照)。近世中国語の段階に入り、語彙化がさらに加速し、語彙の造りや使用が成熟していく背景を受け、慣習的に用いられている意味が定着したと考えられる。次に、首領、心腹・腹心、股肱、爪牙の意味拡張には、メタファーもメトニミーも働いているが、メタファーが主要な役割を果たしていると考えられる。例えば、「首領」には命という意味は、

「保首領」のように古代斬首の刑と緊密に関わっているので (e.g.丁 2006)、メトニミーや頻繁な使用を通して次第に「首領」の意味に定着したと考えられる。また、「心腹」が豊かな意味を拡張したのは、メタファーが主要な動機づけとして働いているからである。〈心腹・腹心は容器〉メタファー、心腹は内臓を納める身体部位として重要視されるため、メタファーによって急所・要地と見なすことができる。「股肱」は、元々太ももと上腕を表したが、メトニミーによって手足全体を表すようになった。そして手足は身体を左右から挟んで支えているものであるため、メタファーの類似性に基づき、君主や諸侯などの上位者を支えている重臣を表すことができた。「爪牙」も、爪と歯の特徴 (抓む、嚙む、鋭い) から、メトニミー、メタファーによって、攻撃力の強いもの、鋭利な武器、勇士や武将、手先と対応づけることができた。股肱と爪牙は身体の外にある部位であり、協働して身体を守ることは、戦勝の将軍や武将が国を戦争から守ることに対応している。そのため、股肱と爪牙と一緒に用いられることがしばしば見られるのは自然であろう。

以下は、首領、心腹・腹心、股肱、爪牙と組織内の役柄とのメタファー対応関係を表 3 にまとめた。

表 3 〈政治・軍事的組織は人間の身体〉メタファーにおける対応関係

| 根源領域 (Source Domain)           | 目標領域 (Target Domain)                                  |
|--------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 人間の身体                          | 政治、軍事的組織                                              |
| 首領                             | 組織の舵取り                                                |
| 心腹 (腹心)                        | (帝王や諸侯の腹心の臣から) 組織の舵取りの腹心で、様々な謀略を出し、内部の機密に関与する輔佐の人     |
| 股肱                             | (手足を表し、帝王や諸侯を支える股肱の臣から) 組織の舵取りを支えて、重任を担い、組織を守る重要な輔佐の人 |
| 爪牙                             | (爪と奥歯の機能を果たす人から) 組織の舵取りの輔佐の人、外部に武力を使って攻撃をする人、あるいは手先   |
| 頭と頸部は身体の上にある                   | 組織の舵取りは権力・権勢の最頂端にある                                   |
| 頭と頸部は命に関わる重要な部位で、切られると命を失う     | 組織の舵取りは組織の中で一番重要な存在であり、舵取りがなくなると、その組織が減じることになる        |
| 心腹は身体内部の大事な臓器を納め、中身を容易に出して見せない | 舵取りの心腹は機密の事に関与し、内部で帷幄に参ずる                             |
| 股肱は身体を支えるには必要不可欠である            | 組織の股肱となる人は重任を担い、組織を支えるには必要不可欠である                      |
| 爪牙は身体の上にある部位で、爪牙を使って他人や獲物を捕まえる | 組織の中で、爪牙となる人は武力行使をし、他人を攻撃する                           |
| 股肱と爪牙は外部を攻撃したり自身を守ったりすることができる  | 股肱、爪牙となる人は一緒に組織を守る事ができる                               |

さらに、(18) ～ (24) の例の分析に基づき、表 4 で示したメタファーの対応関係が観察される。表 3 とは目標領域が異なっているが、同様に身体の上・腹心、股肱・手足を根源領域の概念要素にしている。大きく言えば、国家というものは、社会の上・政治的・軍事的組織に属していると考えられる。認知意味論の知見を援用すると、メタファーを支える基礎である、Lakoff(1987)による〈部分・全体〉スキーマ、〈中心・周辺〉スキーマというスキーマが挙げられる。これらのスキーマに基づくと、表 3 と表 4 のメタファーは一見異なるが、互いに独立しているのではなく、実際に協働している。例えば、表 3 のように、身体という〈全体〉には、心腹や股肱がその〈部分〉として働いている。しかし、その中ではすべての〈部分〉が同じではなく、表 4 のように、心腹は中心的地位、手足・股肱は周辺的な地位を占めている (e.g.(18)(19))。例えば、手足が病んだことは、身体に影響を及ぼすが、大きなダメージをもたらすことはなかろう (e.g.(23))。逆に、心腹が病んだとなると、身体内部に深い、致命的な損傷が起こってしまう (e.g.(15)(21))。一方、(19) のように、手足が失われると、危険にさらけ出された身体・心腹が壊れることになる。つまり、中国語では、手足と身体・心腹は相俟って、互いに必要不可欠なものとなるのである。

総じて、股肱と心腹は君主にとっての重臣であり、中心地域も周辺地域も国にとって重要な地であるが、身体の上にある部位、国の核心にある要地のほうは、全体に大きな影響を与えると考えられる。

表 4 〈国家の統治地域は人間の身体〉メタファーにおける対応関係

| 根源領域 (Source Domain)             | 目標領域 (Target Domain)                       |
|----------------------------------|--------------------------------------------|
| 人間の身体                            | 国家の統治地域                                    |
| 心腹・腹心                            | 内部、核心的地域                                   |
| 手足・股肱                            | 外部、周辺的地域                                   |
| 手足・股肱は心腹を抱えて保護する                 | 外部の地域は手足のように核心の地域を囲んで護衛する                  |
| 心腹・腹心が病んだり壊れたりすると、身体に致命的な損傷をもたらす | 国の核心となる要地が敵に襲われたり、占領されたりすると、存立危機事態となる      |
| 四肢が病んでも、心腹の病より身体機能に大きな影響をもたらさない  | 外部の周辺的地域が敵に襲われても、国全体には、内部の憂患より大きな影響をもたらさない |
| 手足が失われた場合、身体に害をもたらす              | 周辺的地域が失われた場合、国内に禍いをもたらす                    |

人間の頭、頸部、手足、胸、腹、爪、牙は身体外部の部位として視覚的に捉えられやすいので、身体部位から得た視覚的情報や感覚などをメタファーやメトニミーを通じて言語表現に反映させることができる。4 節～5 節の分析・考察からみると、それぞれの身体部位の機能や特徴に対する認識、経験は基盤として、心腹や股肱のような二音節語の意味拡張を支えていると考えられる。総じていうと、中国語では、ある身体部位詞が単独に使われる場合があるが、同じカテゴリーの身体部位詞と複合し、さらに他の関連性のある身体部位詞と協働して身体に関する認知体系を構築することもある。つまり、中国語には、身体部位を単独に取り扱うのではなく、「心腹」「股肱」など一連の二音節語を用いて身体を全体的に把握している特徴があるのである。

6. 今後の課題

以上では、中国語における身体部位を表す二音節語、心腹・腹心、股肱、爪牙の通時的意味分析、認知言語学的考察を行った。これらの二音節語が関連しあい、メタファーを通じて、1 つの組織の中において、それぞれがどんな役柄を表しているかを明らかにし、〈政治・軍事的組織は人間の身体〉と〈国家の統治地域は人間の身体〉という概念メタファーを主張した。今後は、認知言語学の立場にたち、「心腹」や「股肱」のほかに、「耳目」や「心膂」も調査対象に入れ、中国語の身体部位詞に関わるメタファーの構造をより精緻化にし、身体部位詞の全体像を把握していきたい。

参考文献

【英文文献】  
Lakoff, G. and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.  
（邦訳：渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸（1986）『レトリックと人生』大修館書店）  
Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things*. University of Chicago Press.  
Johnson, M. (1987). *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. University of Chicago Press.  
【中国語文献】  
丁喜霞（2006）《中古常用并列双音词的成词和演变研究》语文出版社  
董秀芳（2002）《词彙化：漢語雙音詞的衍生和發展》四川民族出版社  
董秀芳（2011）《词汇化：汉语双音词的衍生和发展（修订本）》商务印书馆  
冯凌宇（2008）《汉语人体词汇研究》中国广播电视出版社  
【日本語文献】  
石川忠久（1997）『新釈漢文大系第 110 卷 詩経（上）』明治書院  
池田知久（編訳）（2012）『訳注 淮南子』講談社学術文庫  
井波律子（訳）（1997）『水滸伝』講談社学術文庫  
宇野精一（2019）『孟子 全訳注』講談社学術文庫  
大野峻（1978）『新釈漢文大系第 67 卷 国語（下）』明治書院  
小竹文夫・小竹武夫（訳）（1971）『史記』（I・II）筑摩書房  
小竹武夫（訳）（1997）『漢書 I 帝紀』ちくま学芸文庫  
小竹武夫（訳）（1998）『漢書 6 列伝Ⅲ』ちくま学芸文庫  
小竹武夫（訳）（1998）『漢書 8 列伝Ⅴ』ちくま学芸文庫  
澤田多喜男・小野四平（訳）（2001）『荀子』中央公論新社

竹内照夫（訳）（1968）『春秋左氏伝』平凡社  
竹内照夫（1964）『新釈漢文大系第12巻 韓非子（下）』明治書院  
本田濟（訳）（2022）『韓非子 全現代語訳』講談社学術文庫

#### 【辞書】

『漢語大詞典』（第二版）漢語大詞典出版社  
『古漢語常用字字典』（修訂版）商務印書館  
『古代漢語詞典』商務印書館  
『大漢和辞典』（修訂第二版）大修館書店（JapanKnowledge Lib によるデジタル版）

#### 【コーパス】

台湾中央研究院古漢語文献語料庫（Academia Sinica Ancient Chinese Corpus、台湾中央研究院古代中国語文献コーパス）  
BCC 語料庫（北京語言大学中国語コーパス）

#### 【付録】

《春秋經傳集解》周・左丘明。西晉・杜預（注）唐・陸德明（釋）。玉田蔣氏藏宋刊巾箱本。四部叢刊經部、商務印書館。  
《國語》周・左丘明。吳・韋昭（注）。明嘉靖金李刊本。四部叢刊史部、商務印書館。  
《六韜》（六卷）周・呂望。瞿氏鐵琴銅劍樓影宋鈔本。四部叢刊子部、商務印書館。  
《孟子》（十四卷）春秋戰國・孟軻。漢・趙岐（注）。清內府藏宋刊本。四部叢刊經部、商務印書館。  
《荀子》（二十卷）戰國・荀況。唐・楊倞（注）。古逸叢書本。四部叢刊子部、商務印書館。  
《韓非子》（二十卷）戰國・韓非。黃堯圃校宋本。四部叢刊子部、商務印書館。  
《呂氏春秋》戰國・呂不韋。前漢・高誘（注）。明宋邦又等刊本。四部叢刊子部、商務印書館。  
《詩經》（毛詩二十卷）前漢・毛亨。後漢・鄭玄（箋）唐・陸德明（釋）。宋刊巾箱本。四部叢刊經部、商務印書館。  
《史記》前漢・司馬遷。宋・裴駟（集解）唐・司馬貞（索隱）唐・張守節（正義）。南宋黃善夫刻本。百衲本二十四史、四部叢刊史部、商務印書館。  
《淮南子》（二十一卷）前漢・劉安。劉泚生影寫北宋本。四部叢刊子部、商務印書館。  
《鹽鐵論》（十卷）前漢・桓寬。明弘治涂氏江陰葉本。四部叢刊子部、商務印書館。  
《漢書》後漢・班固。唐・顏師古（注）。北宋景祐刊本。百衲本二十四史、四部叢刊史部、商務印書館。  
《東觀漢記》後漢・劉珍等。王雲五（主編）、四庫全書珍本別輯。  
《前漢紀》後漢・荀悅。無錫孫氏小綠天藏明嘉靖本。四部叢刊史部、商務印書館。  
《三國志》晉・陳壽。南朝宋・裴松之（注）。宋紹熙刊本。百衲本二十四史、四部叢刊史部、商務印書館。  
《世說新語》南朝宋・劉義慶。南朝梁・劉峻（注）。明袁氏嘉趣堂刊本。四部叢刊子部、商務印書館。  
《後漢書》南朝宋・範曄。唐・李賢（注）。宋紹興本原闕五卷半、北平圖書館藏本配補。百衲本二十四史、四部叢刊史部、商務印書館。  
《宋書》梁・沈約。吳興劉氏嘉業堂藏宋蜀大字本。百衲本二十四史、四部叢刊史部、商務印書館。  
《南齊書》梁・蕭子顯。江安傅氏雙鑑樓藏宋蜀大字本。百衲本二十四史、四部叢刊史部、商務印書館。  
《晉書》唐太宗文皇帝御撰。海甯蔣氏衍芬草堂藏宋本原闕載記三十卷、江蘇省立國學圖書館藏宋本配補。百衲本二十四史、四部叢刊史部、商務印書館。  
《張載集》北宋・張載。ASACC では出典不明。  
《五代史平話》（宋代）上海古籍出版社。ASACC による。  
《忠義水滸傳》明・施耐庵、羅貫中。貫雅文化事業有限公司。ASACC による。  
《喻世明言》明・馮夢龍。里仁書局。ASACC による。  
《醒世恆言》明・馮夢龍。三民書局。ASACC による。  
《西湖二集》明・周楫。江蘇古籍出版社。ASACC による。  
《閩都別記》（清代）福建人民出版社。ASACC による。

#### 謝辞

本稿の作成にあたり、大阪大学人文学研究科の大森文子教授、王周明教授、田中智行教授より丁寧なご指導、有益かつ貴重なご助言・ご指摘をいただきました。心より厚くお礼を申し上げます。なお、本稿の不備や不足はすべて筆者に帰するものです。